

熊本大学蔵永青文庫本別本「壁草」

岩 下 紀 之

愛知淑徳大学国語国文第五号から七号にかけて、永青文庫本「壁草」を翻刻紹介したが、ここには同蔵の別本をとりあげた。本書も伝幽斎筆で上巻のみの零本である。細川幽斎の連歌活動、すなわち連歌会出座等の事跡、連歌書の書写などが、きわめて大きな意味をもつことは明白であるが、目下のところとりまとめる力がない。将来永青文庫本「壁草」二本について、何らかの考えをまとめてみたいと思っている。今回も翻刻を許可された永青文庫、熊本大学に感謝する。なお、句番号一九五と一九六のあいだは、明らかに二丁分落丁があり、そのため番号が混乱している。それで句番号は前句が奇数、付句が偶数になるべきところ、これ以後は反対になっている。

壁草と云事かへに生る草をいつまで草と云、根も
いらすはかなき心にて云也、宗祇の題し給也

春連哥 但他本所持分相除之

一 わかれしかたそけふもかすめる

二 天地となりていく春たちぬらん

前句は旅也、古郷を立はなれたるに跡の山などのか
すむ事也、付心は、天地開闢の時より春と云事立は
しまりて、けふまで幾春かすむらんと也、わかれし
は天地の事なり

三 雪よりいつる鳥の一こゑ

四 山もとのかすみのあさけおくさえて

心は、山本は霞みながら、奥は雪さむけなる鶯の、
かすみの立てあたゝかなる所へ出たるさま也

五 梢をやまの庭のうくひす

六 玉すたれあくる夜をこめかすみ来て

付心は、朝の庭に霞の立きたるを、山のことくなるに、
鶯の鳴ておもしろきさま也、玉簾はあくるの枕言也、

是は上るを明るにかよはしていへり、しのゝめのさ
ま也

七 あたし心はさもあらはあれ

八 あけほのや霞にたてるすゑのまつ

付心は、花鳥風月に心をうつすは、定心ならず、あ
た心也、あしけれ共力なし、曙の末の松山の眺望、
言語道断なれば、打なかめんと也、君を置てあた
し心を

九 道しるへせよ谷のうくひす

一〇 跡うつむ雪に岩ふむはるさえて

心は、雪に跡のみえしも、春寒く成て雪の積りて道も
絶ゆけは、鶯道しるへせよと也、岩ふむ谷のさま也

一一 さやかにもみるへき花にくもかすみ

一二 あさ日いさよふ春のをやま

心は、さやかと云に朝日を思ひよれる也、朝霞のふ
かければ、花の朝日もさやかに見えぬ事也

一三 まつとへかしなはるのやまさと

一四 うくひすも雪きえはとやまたるらん

春の山里に、雪打積りてさひしきに、雪は消す共先
とへかしと也、鶯の声なかりせば

一五 身をいさめけり夢のはるかせ

一六 鶯にぬる夜の床をおきいて、

心は、春の曙のおもしろきをもなかめす打ねたるに、

鶯の鳴たるは、我をさたのかきりといさむるやう也

一七 花にさそはれくるもはかなし

一八 鶯のやとあくからす梅さきて

鶯は花にねぬ物也、花のさけは我宿をあくかれて花
の梢に鳴たる也

一九 身にしむ風にことやつてまし

二〇 梅かゝにぬしさたまらすあくかれて

いつく共なき風に、梅の匂ひの身にしむは、たかや
との梅そ、ことつてはやと也

二一 なれきつる花もあたる色みえて

二二 うつらぬもなく梅にほふ袖

前句の花もと云字に人持也、人は姿うつくしけれ共、
心のうつりやすきは無曲、其ごとく梅は色香うつく

しく面白けれども、諸人の袖にうつる事ねたまる事^(マツ)
也

二三 むら／＼しけるみちのへの草

二四 青柳にかけふむ人の跡見えて

青柳の陰に人のしけく立よれば、草も萌かねて村
／＼に見ゆる也

二五 たかさとまでかふかき梅かゝ

二六 月やなをあらしの末にかすむらん

梅か香を嵐の送るは千里まで匂ふ心也、一句は嵐の
後に月の猶かすみておもしろきさま也

二七 春もなからの山かせそふく

二八 うらかすむ志賀のふるさと月すみて

長柄山には春風寒て月のしろけれ共、志賀の浦は打
かすみたる也

二九 いつにしもしかし春そとあくかれて

三〇 おほろ月夜にまよふかりかね

春の夜の月の霞みたるにあくかれて、鷹も帰かねた
るさま也、^照もせずくもりも

三 さくらそわかぬみねのしら雲

三 青柳のかつらきしるく花さきて

葛城の桜は咲て雲にまかへ共、青柳は雲にもまかはすしるく見ゆる事也、此青柳枕詞にあらず実の柳也

三 見ればさひしくけふりたつ也

三 一村のはやし磯屋花さきて

一村の林の磯屋打けふりて、其あたりに花の咲たるさまさひしき也

三 春はかはらすかすみたつ空

三 花のみや古都も又さかむ

古都のさま万物替はてぬれ共、花独、昔の色を見せたる事也、昔古郷のならの都をきてみれば

三 とを山さくらおりくるやたれ

三 九重の都の花になをあかて

都の花の面白きに、猶遠山の花みる事、人の心の満足せぬ事也

三 元 いつれの山をたつねてかどふ

三 花にたれ都をきてうかるらん

前句捨世の人を尋ぬる事也、付心都の花を置てあかすも、いつれの山の花をとふと云心也

四 野山のかきりたつねてそゆく

四 花にけさ霞とともに立いて、

霞と共に立出て、あらぬ野山の花にあくかるゝ事也

四 去年のしをりの花や待らん

四 山さくらまたみぬかたにとをくきて

此春はあらぬかたの花を尋ぬれば、年々みしかたの花は我を待らんと也、昔吉野山去年のし折

四 駒もなつむや山の下水

四 岩ねふむ花にはあかす日は暮て

いはねふむ山に終日花を尋ねて、日も暮ぬれば駒もなつむ事也

四 便もまれにとをき山こえ

四 尋ねぬよふこ鳥たに花になけ

人もなき山に花を尋かねたるに、せめてよふことり事とへかしと也、たよりとはたつきの事也、昔遠近

のたつきもしらぬ

咒 かへりをくれぬさくらちる山

丑 みる人のなへてになさは花もうし

諸人暮ぬれば花のかけを出れ共、我は帰をくれて花に執心するを、なへての人のやうに、花の思は、無曲と奉公たてしたる也

丑 たのむゆへにそ身をもくるしむ

丑 うつろはん色としるく花を見て

花はうつろひやすき物と知ながら、猶頼みてもしもちらてやあらんと思ふ故に、ちれはいたく心くるしき也

丑 きてみる山に草のかりいほ

番世をいとふ心も花につきそめて

花をきてみる山に、其儘草庵を結て住也、花のあたなるを見て世中を思とる也

丑 命にのこす入あひのかね

丑 又やみん老の世の花あすもまで

花を見て帰暮、老後の命あすをしらねは、もしなからへてあすもみる事もやあらん、あすもまでと也

丑 忍ふともやはかへるいにしへ

丑 あた人に成てもくらせ花のはる

花をみる心、あた心なれば、人は二度わかきに帰らねはちからなし、あた人にも成て花をみる事也

丑 あはすともよし先たつねみん

丑 身は花のさかり待間もおほつかな

前句恋也、付心人の命あすをしらぬ習なれ共、さすかにまつ花をたつねてみんと也

丑 めにみえぬ神とてあたになすやたれ

丑 おる人つらき花としらすや

是は筑紫安楽寺に行けるもの、梅花を折ける、其夜の夢に

なさけなくおる人つらし我宿のあるしわすれぬ梅の立枝を

丑 こゝろくらへにまけんとそする

丑 ちとふまでに折やらぬ花はちりつへし

心は我宿の花を、さり共とひこそせめ、つれなく待て見んと思へは、花もはやうつろひ時分なれば、心

くらへに我まけて、折てやらんと思ふ心也

空 いかにかはれるゆふへなるらん

空 かり初もたれかめかるゝ花さかり

前句恋也、付心かり初にも花に目かれぬに、いつの

間に色の替けるよと也 番くるとあくともめかれぬ

空 たのむもはかないときなき人

空 わきてなを形みや花もあたらん

是は源氏に、三宮の六歳計の時、紫上隠給に、此対

上の花を我形見にみ給へとありしかは、春毎に屏風

なとたて風を防ぎ給し事也

空 霞立つ、日こそくれぬれ

空 鳥そなく花のいつくにかへるらん

霞のふかく立渡たる夕暮の、花の梢より立はなるゝ

鳥は、いつくに帰るらんと也、霞てみえぬさま也

空 朝なゝかすめる野へに打いてゝ

空 見れば都は花の雲井ち

空 かねを木間の花のした道

空 山さくら軒端にたかく寺ふりて

古寺の鐘、軒端の桜の木間よりひゝきたるさま也

空 春やいたらぬかたもなからん

空 石はしる滝こそ花にうらみなれ

花の咲所へはいかなる方へもいたれ共、滝のある所

へはゆかれぬ事也、番石はしる滝なくもかな

空 さと人はかへる野はらのかり枕

空 花にさ夜ふけ松かせそふく

空 うらみのあれはことのはもなし

空 告さりし花にかせふく宿とひて

空 今さらいはんことのはもなし

空 花盛とはぬうらみはちるを見よ

花に人を待けれ共とはすして、ちる時間来たる人に

何ともうらむへきやうなければ、我心をはちる花を

見て知給へと云心也

空 あやなおほくのうらみをそおふ

空 ほともへすちる世に花のさきそめて

有為転変の世中に咲て、花も人にあちきなく物をお

もはせ、恨をおふ事也、あやなはあちきなき事也

全 鳥は音になく雪のかり人

八六 さくら花吹かふ風に駒とめて

椽の雪也、狩場の興のさま也

八七 をそくとひてはいそくかへるさ

八八 深からぬ心を花やちりてみん

八九 ひたすら雪になれるくろかみ

九〇 やすらへははらふ計に花散て

前句白髪也、付心聞ゆ

九一 世中は何かふり行事ならぬ

九二 昨日の花は庭のしら雪

九三 花さそふ嵐の庭の 付やう願也

九四 もとのみとりを嶺の松かけ

九五 散花はうつむも昔にはやくちて

九六 峯の松陰の苔を落花の埋しか、朽はてゝ本の苔の緑

に成たる事也

九七 庭にくちぬる木ゝのあはれさ

九八 さくら花雪もしはしの名残にて

九九 庭の木ゝの桜花雪とふりても又躑朽ぬる事也

一〇〇 身をなくさむもこゝろなりけり

一〇一 やすめ花なきさとちるも見し

一〇二 心は花の咲たる所へきて見れば、我古郷いよく住

りく成けり、其花やかて散て、跡のさひしくなれば、

所詮花なき里に住へき物そとなくさむ也、我里をは

なれてみる花也

一〇三 何かおもひとなりてかなしき

一〇四 花にたに嵐はきかし都人

古今長哥に、こゝのかさねのうちにては、嵐の音も

きかさりきと有を取て、花にさへ嵐をきかぬ都人な

れは、何にも思はあらしと也

一〇五 見すてし夢の跡そはかなき

一〇六 おも影は青葉の花のみやこ人

一〇七 うらみ花つゝ人そまたるゝ

一〇八 雨にしも嵐吹そふ花のもと

一〇九 つらかりしをもさのみうらみし

一一〇 一本も嵐の残す花を見て

一一一 柴の庵花の便もいかならん

二〇 風もさそへとさくらちるかけ

世を捨る人は身をおしまぬ物也、花さへ柴戸にさくは身をおしますちるやと也

二〇元 うらみしよさてこそ哀ふかゝらめ

二〇ちらすは何かはなののはかなき

哥 ちれはこそいとゝ

二二 いくむら柳うちなひくかけ

二三 舟にけふ春の河つらすきやらて

心は河辺道遥のさま也、川辺の柳を打詠て舟の行やらぬさま也

二三 軒はにすかるさゝかにの糸

二四 春雨のなこりさひしき露見えて

哥 つれくゝと春のなかめのさひしきは忍ふにつたふ

軒の玉水

二五 ひとりたゝなかめてさひし春の雪

二六 雨のとかなる軒の玉水

二七 しつけきやとり花おつるくれ

二八 ふる音もしのふの軒のはるの雨

心はしつけきを付んとて忍ふといへり、花の落るを雨にてつくる也

二九 水無瀬の宮のはるの夕くれ

三〇 霞にや秋の哀はこもるらん

水無瀬は春秋のあらそひある所なれば、水無瀬の宮のかすむ暮のさひしきには、秋の哀までこもる事也

哥 見わたせは山本かすむ

三三 むかしの庭のさくらちるかけ

三四 道しはに葦つむ袖うちへて

古郷には道芝えん也、葦は桜の散時節盛なれば也

三三 とはゝや人に松のした道

三四 名もしらぬ春のむら草花さきて

三五 荒田のはらのあはれなる色

三六 それとなくしけき春草花咲て

此哀はおもしろき事也

三七 衣手に花の雪ちるかけ分て

三八 片野のみのゝかすむ日くらし

終日彼野にあそぶさま也 哥 又やみん片野の

一三 夕のかねにかすむ柴の戸

一四 哀にも春の西日のさしすて、

柴の戸は西をねかふ所なれば、西日といへり、其時節さひしきさま也

一五 花の山路にあくかるゝころ

一六 春もうき古郷人や老ならん

一七 郭公それならぬかと鳴すて、

一八 木すゑの藤のたそかれの色

梢の藤夕暮深き色を、時鳥は藤と見わけずして 鳴過けるやと也、藤とするならばやすらはん物をと云心也

心也

一九 みよしのゝ吉野のおくの花にきて

二〇 春をくらせはきしのふちなみ

二一 いはぬ名残も文に見えけり

二二 款冬を春も暮ぬと折そへて

いはぬは款冬のえん也、款冬に文をそへて送由也、

二三 款冬の花色衣

二四 名残を花にいふもはかなし

二五 こさせしと春をやおもふかきつはた

杜若を垣に取成て、こさせしと花かきをゆふやう也、

春のこすとはくるゝ事也

二六 いつくにゆかん嶺の松かせ

二七 帰る道春もまよへとちる花に

二八 桜花散かひくもれ 付やう頭也

二九 なみたやおとすうくひすのこゑ

三〇 二たひと年にあひみぬ春暮て

春鶯もこゑたてゝなけ一とせに二たひとたにくへき

春かは

夏連歌

三一 衣手うすし嵐ふく空

三二 咲けふもなを残る花ちる夏はきて

心は、衣の薄きを夏になして、嵐ふくに花ちるとい

へり

三三 木ふかきおくに人かけそする

三四 夏山のみとりに花やのころらん

一四 糸くりたむる滝のしらなみ

一五 涼しくもたれをりいてし夏衣タヌ

母 清滝のせゝの白糸 清滝川高雄山のあたり也

一六 山の本草の名をしるもなし

一七 ひとりとや世を卵花のさきぬらん

母 世中をいとふ山への本草とやあな卵花の色に出けん

一八 ふりてもたえぬをくるまの道

一九 かさす日に神もいく代かあふひ草

二〇 跡よりふれるかせのむら雨

二一 郭公花もちりあへすはやなきて

二二 待ていく夜と月もつたへよ

二三 つれなきも誰にうらみんほとゝきす

二四 あはれをよその事と思ふな

二五 たか為か空もくもらんほとゝきす

二六 夢ともさすかわかぬおもかけ

二七 ほとゝきすたかならねと聞し夜に

母 一声は夢にまきれて時鳥遠さかるをそさたかには

きく

二八 おもひやいつる今のをとつれ

二九 郭公をのかときはの山こえて

母 思出るときはの山の岩つゝしいはねはこそあれ恋しき

三〇 ことほりかほに打かこつこゑ

三一 郭公忍ふの山にたへわひて

忍の山なれば時鳥はなくまじき所なれ共、思ひ餘打なくこと、誠にことほりかほ也

三二 夢となせはやをとつれもせぬ

三三 それかとも又きかはこそほとゝきす

三四 いつれの身にてかくしのふらん

三五 思ふ事打もなかなんほとゝきす

三六 のとけき雨をひとりきかめや

三七 郭公思ふよひるの友もかな

源氏に、のとかなる雨の宵居にと有をとりて也

三八 なくさめて程ふるのみは何ならず

三九 なかてや雨もやまほとゝきす

一五 打まところむもみしかよの夢

一六 時鳥おもひたえさせとふもうし

一七 みる人やたれ軒のたち花

一八 郭公鳴つる月を雲まにて

時鳥鳴すてたる雲まの月を、軒の橋のかほる時節に

みる人、さこそとらやむ事也

一九 又うき雲の雨なざそひそ

二〇 時鳥ねたる声する山さとに

二一 更るまてねぬこゑきくも猶あやし

二二 いかなる夜半そなく郭公

二三 うき東路そ行空もなき

二四 時鳥老曾の杜にきゝすてゝ

哥東路の思出にせん

二五 夏の夜はたゝ時のまの程なれや

二六 なけは雲ひく山ほとゝぎす

哥夏の夜をふすかと

二七 後も又つれなきこそはたのみなれ

二八 八月はあり明のやまほとゝぎす

時鳥鳴すてゝの後も、有明の月のつれなく残るにや

なかと、たのもしき也、哥有明のつれなくみえし

二九 雲は旅なる山路ともなし

三〇 帰るにはしかしもいつこ郭公

雲も郭公も山こそ栖なれ、帰るにはしかしと鳴事、

更に心得ぬ事也、不如帰となけは也

三一 一夜の宿のなこりこそあれ

三二 片敷の袂にかほるあやめ草

後まて匂ふ事也

三三 今朝はたか軒の橋かほるらん

三四 ふきてあやめもわかぬ家く

三五 花たちはなに人やかへらん

三六 はては袖からくれなるに成つへし

三七 あさ夕露をなてしこのかけ

撫子を朝夕なつる袖なれば、紅にならんと也

三八 又むら雨の露のすゝしき

三九 ほのうすき蟬のは山の夕日かけ

四〇 雲にわかれて月のこる空

三〇一 清見かた岩なみしらむ夏の夜に

番清見濁月は難面き天の戸をまたてもしらむ波の上
哉

同とめねと一夜は過ぬ清見かた浪にわかるゝ横雲
の空

三〇二 とりあへぬまで明やすき比

三〇三 蛭とふやとは中川又やねん

京にある中川にすゝむ時分面白きに、はやく明行事
のうしと也、源氏番強面を恨もあへぬきぬく／＼に取あ
へぬまで驚かすらん、中川の宿にての哥也、蛭も中
川の縁也

三〇四 はなれ小嶋にあし火たくかけ

三〇五 とふ蛭行かたもなくさ夜更て

蛭の小嶋に火を焼たる事也

三〇六 庭すさましく成やはてまし

三〇七 此比の夏をせぎやる水すみて

三〇八 くるやこすやの暮ことの空

三〇九 山かけに秋をおほゆる水せきて

三一〇 琴のひゝきにさむき夕くれ

三一一 夏の日のかたふくなかれ岩こえて
流水曲の事也

三一二 むす苔ふかし山の井の水

三一二 涼しさは桐の若葉の木のもとに

桐は井の縁也、山にも縁あり

三二四 山の陰野は秋かせそふく

三二五 日くらしにかけとめらるゝ夕すゝみ

三二六 竹は千尋に夏ふかきかけ

三二七 よひく／＼のうたゝね涼し窓のまへ

三八 水にめくれる池の涼しさ

三九 手にならず扇に匂ふうすけぶり

たき物の立とまるへきと云心也、風の縁に扇也

三三〇 きけは都そとをさかりゆく

三三〇 夕立になをなる神のをとは山

三三一 なを天地をてらす日のかけ

三三二 中／＼の夕たち過てあつき野に

三三四 なかむれば水海わたる舟の上

三五 夕立ならしけしき涼しき

哥 風あらく夕立波の高ければしつ心なき舟の内かな
湖上舟にてよみたる哥也

三六 おりはへ水に御被するころ

三七 夏衣日もやくうすく暮初て

秋はかなしければ、夏衣ほす共いつかはかんと也

三八 はやくもいまは袖のすゝしき

三九 行水の岩きる瀬ゝに御被して

水の岩きるははやく事也

秋連哥

三〇 色にはわかぬ庭の夏草

三一 このねぬる朝け露けき秋は来て

このねぬるは朝の枕詞也

三二 心にうかひ秋はきにけり

三三 涙もやおちてなへての露ならん

世上の露よりも先立て、泪の心にうかふ事也

三四 珍しく月の影にやむかふらん

熊本大学蔵永青文庫本別本「壁草」

三五 こよひふたつの星のかたらひ

三六 秋の風麓の稲葉吹こして

三七 かりほの外もほふむら萩

哥 秋の田の草の庵も匂ふまでさける秋萩見れとあかぬ

かも

三八 独なかむる秋のあはれさ

三九 涙もや下葉色つく萩の露

哥 秋萩の下葉色付今よりや、付やう頭也

四〇 かよへる道の草のたえく

四一 さをしかのかた岡かくる跡見えて

四二 秋は八重たつ霧のさひしさ

四三 鹿の音はまかきもわかぬをのゝさと

夕霧巻の心也

四四 思ひ入深山をろしよ物かなし

四五 雲行木すゑ日くらしそなく

深山の梢に雲の行時分、蛸の鳴て物かなしき也

四六 風そよく野路の萱原暮初て

四七 むしの音いつれみたれあふこゑ

二四八 ねふりさめたる露のたまくら

二四九 ともし火はまたく壁のきりくす

二五〇 ひとりやねなん月をそき空

二五一 しの音もよはる風をかたしきて

二五二 岩ツかねの床に風を片敷て

二五三 小菽かもとに風かよふくれ

二五四 古郷はむしの音にさへ袖ぬれて

萩は古郷の物也、付所頭也、一句又明也

二五五 山下道の露のさひしさ

二五六 しの音にさそはれくれは草の庵

山下道を分くれは、草庵に虫の案内者したる也

二五七 露よりあたのこゝろなりけり

二五八 あさかほにまかきかこはせ住やたれ

二五九 露としるとも身をおしめたゝ

二六〇 権の花もさかりはある世にて

権花 一日自成榮

二六一 竹のかすく窓そさひしき

二六二 権はかれし夕かけ露見えて

二六三 露けさも打ぬる人はおもはめや

二六四 三月をまくらの花の秋の野

二六五 心をつくすあけほの秋

二六六 うす霧の花の色くわかぬ野に

二六七 たれに見よとかさけるなてしこ

二七八 独ある宿の夕かけ露をきて

二七九 我に見よとにはあらし、たか為にさけるそと也、

我ノミヤ哀とオモハん菴なく夕かけのやまと撫子

二八〇 ふるはかりなるむら雨の空

二八一 籜のはのみ山の露にかせたちて

二八二 雨にもまさる露そみたるゝ

二八三 朝霧の身のしろ衣しほれきて

身のしろ衣は、装のかはりにきる衣也、付やう頭也

二八四 心つくしのあちきなの世や

二八五 すみのほる空より月は木のまにて

二八六 木間ツよりもりくる

二八七 入日の雲そゆくゑしられぬ

二八八 空とをみ山のはのほる月すみて

二六六 名に残る志賀の大そら尋きて

二六七 見ればはるかに月ひとりすむ

二七八 ^哥 さゝ浪やくにつみかみの浦さひてふるき都に月独す

む

二七六 ゆへありかほに出る世中

二七九 憂秋の雲まを月のかきわけて

うき秋の時分月の雲まを分て出る事、故ありかほ也

二八〇 秋きぬとしれはいたらぬかたもなし

二八一 やね覚のこゝろなるらん

^哥 遥なるもろこしまても行物は

二八二 山ふかく入のみはいとふ世ならめや

二八三 月のこゝろのゆくゑしらはや

二八四 すゝふく風そ野へにはけしき

二八五 今宵たれ月の手枕夢もみん

^哥 こよひたれすゝふく

二八六 やゝさむき程はしられて更る夜に

二八七 はしろたへ萩はうはかせ

二八八 いまや都も秋ふくるそら

二八九 詠れは月のうちさへものさひし

^哥 なかめつゝ思ふもさひし

二九〇 行人もなき道のへの秋

二九一 我影にともなひつゝも月を見て

二九二 霧立まよふ山はあけほの

二九三 行心月のいつくにわかるらん

月につれて行心いつくにてわかるらん、霧くらけれ

はしらざる也

二九四 露ふく風にはるゝふるさと

二九五 軒はもる月こそむかし忍草

古郷ノ軒端もる月サナカラ忍草と也

二九六 玉をみかけるいにしへの跡

二九七 浅茅生や秋のしら露月澄て

二九八 秋の夜ふくるあさちふのやと

二九九 露ことに影する月をひとり見て

三〇〇 秋のおもひそなくはかりなる

三〇一 ことゝへはこたへぬ月をひとり見て

三〇二 舟よはふむかひに人はみえやらて

三〇三 あまひこかとそ月にこたふる

三〇四 とひ行鷺の色はきえけり

三〇五 むは玉の夜からすしるく月すみて

三〇六 誰露はらふ跡としも見す

三〇七 月の入山まではいつ尋ねらん

三〇八 むしの音いつれやとのあき風

三〇九 更て誰月の名残をうたふらん

源氏に、紅梅のおとゝのうたひ給ふを、鈴虫の声に

もまかへりと有也

三〇〇 岩こす水のすさまじきかけ

三〇一 夜わたるや月も宇治川秋のかせ

宇治河の岩こす浪にすむ月もうきかと也、宇治川は

はやき川なれば也

三〇二 秋風さむきゆふくれのそら

三〇三 帰る野の袖に降たつ鳴なきて

夕暮の野をかへれば鳴の鳴てさひしき様也

三〇四 秋かせはたかなかめより過ぬらん

三〇五 わかやとのうへに鷹なきてゆく

三〇六 さそはれ月に更る夜の空

三〇七 哀にもつらにをくれぬ鷹なきて

三〇八 つらき夜をしも何したふらん

三〇九 なきてくる鷹もはかなし秋の空

三〇〇 磯かかり霜のわさ田のいかならん

三〇一 朝きりさむし鷹わたるそら

朝霧寒く鷹の鳴たる比、磯か田も色付て、さそ面白

かるらんと也

三〇二 こすゑは秋の風さはくやと

三〇三 軒ちかき松にはふくす色付て

三〇四 物思へとの袖のあき風

三〇五 花すゝきまねくに人の行やらて

花薄面白ければ道行やらぬ也

三〇六 野は露けしやいつくにかねん

三〇七 枕せはちらまくおしき花すゝき

三〇八 手折もつ花の秋草打かほり

三〇九 野のみや人の露わくるころ

三〇〇 村くくに雲行空の鷹のこゑ

三三 風に野分のおも影そたつ

三四 花むら／＼の秋くさのほら

三五 朝ことの露のさかりに野分して

三六 おもかけさへそおとろへて似す

三七 一目見し秋の花みな野分して

三八 秋の花みなおとろへて、浅茅か原もかれ／＼と源氏

ニ有

三九 紅葉をかさす人もこそあれ

四〇 七月白き山ちの菊を折はへて

四一 紅葉質に、かつらの紅葉散ぬれば前なる菊を折てか

さしかへとあり

四二 こゝやかしこにうつくなくこゑ

四三 住ふるすさとはゆふへの秋の風

四四 いにしへを忍ふにいとゝ露けくて

四五 老ぬるはかり秋はたれうき

四六 秋のまくらを誰さたむらん

四七 露は身もりきぬ計のうたゝねに

四八 あかつきささむみ露なしくれそ

四九 まはらなる板屋のねさめ秋ふけて

五〇 あくるまの限もしらす月澄て

五一 かねそをとす秋のよのそら

五二 打むかはれす山かせそふく

五三 白たへの月に砧を巻すて、

山風のあらければ、衣をうちかねて巻たる事也、一

句は月に執心して衣をうたぬ也

五四 露より霜にしろき月かけ

五五 衣うつ礎にいたくさ夜ふけて

衣うつ折ふしの夜つよく更ければ、露も霜と成也

五六 暮ぬれば妻とふ鹿のあくかれて

五七 色こきわさ田かる人もまた

哥アリ

五八 むら／＼にをく野へそ露けき

五九 朝きりに初霜ましり秋ふけて

六〇 むら竹の露や葉わけにこもるらん

六一 はやしに何そかたへ色こき

六二 舟とむる入江の山に鹿なきて

三五 なみや夕日のそむるもみちは

入江の山に鹿の鳴て面白に、猶夕日の波をそめて紅

葉を見せたる也

三六 月待かたの山そしくるゝ

三七 二里つゝ音羽の梢色付て

三八 日くらしの声もさひしき山里に

三九 木のは色つきぎりわたるそら

四〇 山とをく帰る狩はのちりくゝに

四一 かさす枝のみのこるもみちは

四二 庭も榎たつ暮のさひしき

四三 いつ散てもみちも風のつてならん

よその紅葉の散くるをたのむ暮のさひしき也

四四 またれにけりな去年の初鷹

四五 忘れぬや菊の花さく秋の空

鴈鳴て菊の

四六 関のわら屋の今朝のたひ人

四七 思ひやれ嵐の風のあきのくれ

あふ坂の嵐の風は

四八 あけすくるまで月をなかめん

四九 くれの秋草木の露をたもとにて

五〇 うち残りつゝ見ゆる川はし

五一 水上の嵐のもみち秋かれて

五二 風にまかするおきつしらなみ

五三 たつた山嶺の木葉に秋かれて

冬連哥

五四 宮ゐしつかに夜こそ更ぬれ

五五 神無月時雨はかりの音はして

神無月には人の社参せぬ事也

五六 うつろひはてぬ草木のみかは

五七 神無月ふるき都は猶さひし

五八 さそないつくも風さゆるをと

五九 かきくもり都も冬のみ空にて

六〇 雪けになれは衝なくこゑ

六一 古郷のさほのかはらのうちしくれ

六二 立もよれふもとにむすふ草のいほ

三七ぬれてしくれに行人やたれ

三八 さ夜更はてぬかすやともたれ

三九時雨へき月ともしらすとをくきて

四〇 ふることかたる秋のたまくら

四一独のみなかきをあかさ夜しくれ

独ねの枕に時雨計なるを語也、ふると云えんに時雨

といへり

四二 秋風は嶺の松にやかへるらん

四三 なみたのしくれ行かたもかな

四四 ゆく水さむく嵐ふく山

四五霜をかぬ岩のはさまも草かれて

四六 はしは霜ふり水そこほれる

四七をさゝはら爪木の道に冬かれて

四八 川風は浪のゆくゑに吹すてゝ

四九みきはあはれにくつる紅葉ゝ

五〇 をとあらましき水のしらなみ

五一時雨やと見れば岩こす木葉にて

時雨かとみれば木葉の音あらく岩こゆる也

四二 としくれぬとや雪ふれる山

四三 木枯に残りてさひし嶺の松

雪ふりて年の

四四 月はあり明の猶ほそき空

四五霜枯の片糸すゝき風吹て

ほそきえんにかたいとすゝきといへり

四六 なかれたえぬや水もさひしき

四七山河やうへはこほりてをとすなり

四八 さりけなく水に晴けりけさの雪

四九月のなこりはうすこほりせり

月の名残は薄氷が見するに、雪は跡もはるゝ也

四〇 ほそくのこれるうつみ火のもと

四一 滝の糸の氷らぬ音はなをさえて

埋火にむかひて聞たるさま也

四二 いく明かたそ霜さむき空

四三 よるの鶴なくや沢水こほりとち

四四 雪にくれ行駒のあしをと

四五 はるゝと岩ふむかはらこほりとち

四六 きけは外面の鳴のたつこゑ

四七 水白き門田や霜もこほらん

門田の水も霜も氷るにや、鳴の立らんと思やる也

四八 行水さゆる河つらのさと

四九 下そよく声の霜夜に目は覚て

あしのかけを行水の、下葉に打そよきて、目の覚たるさま也

四〇 かた山舟のよるのあら磯

四一 みつとなきしほ津すか浦風さえて

片山も塩津菅浦、何も近江也、湖なればみつとなきほとにつゝけて、風の音さむきは塩のやうに聞えたるは、全躰あら磯のやう也

四二 木葉かたしきひとりぬる山

四三 岩かねの床に月更霜さえて

岩ツかねの床に風を

四四 篠ふく軒は木からしそふく

四五 枕まで霜をく月やふけぬらん

篠ふく軒まはらなる、霜は枕まで置いて月の寒き也

四六 里とをみ残る灯更やらて

四七 霜や野寺のかねさそふらん

一句は、鐘は霜になる物也、付やう頭也

四八 たえく見ゆるくものかけはし

新古
カサ、キノ雲ノ梯秋暮テ夜ハニハ霜ヤサエワタルラ

ン寂蓮

四九 霜白き夜はのかさゝき声ふけて

梯に霜白く、鶴の声までさむき事也

四〇 いかなる岩のはさまにかねん

四一 なく鴛のうはけも水もこほる夜に

四二 水すさましき山かけのみち

四三 さはき立鴨のむら鳥かすく

四四 あそふもをしの跡のうきくさ

四五 雪にけさ鳩のかよひち見え初て

あそふとは鳩の事也、萍に鳩の通路のみゆる也

四六 やすらふ磯はあらきなみ風

四七 立るやはなれたにやすきむら千とり

四八 いく田の川の鳥のさむけさ

四元冬にうき身をかきりとやわひぬらん

津国母の生田の河に鳥もぬは身を隈とや思成らん

四〇 長閑なる空も程なくさえかへり

四一 朝日はかりの冬の山もと

朝日は長閑にて、やかて寒き山家のさま也、一句は

短日事也

四二 とへかした風もさえ行夕まくれ

四三 竹のはさひしあられふるやと

竹の葉に霰つら／＼さゆる夜は独はぬへき心ちこそ
せぬ

四四 柴たくすみかあるゝ山かけ

四五 あられちり時雨せぬ日をいつかみん

あるゝとは、霰時雨のふりあるゝ事也、前句は庵の
あるゝ也

四六 雲に嵐のをとそさえぬる

四七 かつらきや時雨もあへす雪やみん

葛城高山なれば雪をいそく也、吾うつり行雲に嵐の

四八 軒もるかせのよはりゆくころ

四九 雨ませの雪やかつふりつもるらん

雪のつもる故に、風の軒はに吹よはる也

五〇 山は雲にもましらさらめや

五一 朝またき雪待庭の雨さえて

サエテフルミヤマハユキモ

五三 路もなき嵐の露の夕間くれ

五五 落葉そなこりけふのあは雪

淡雪は路もなく消て、おちは計残る也

五七 たとるはかりにおもかはりせり

五九 ふみなるゝ山路に今朝は雪ふりて

六一 とはれぬことにならふ山さと

六三 誰となく雪のあしたやまたるらん

山家はとはれぬにならへ共、雪の朝は人を待心也

六五 こそゑをまへの柴のかりいほ

六九 雪折の松にとほその道たえて

七〇 入日の空は風ものこらす

七二 雪つもる松に尾上のかねさえて

おのへの松に雪のつもるは、風も残らぬ事也、入日

に鐘を付也

四三 やとれば嶺に清きともし火

四四 山さとの雪のあかつきかねなりて

四五 山里の雪峯に清くみえて、鐘のさむき事也

四六 ゆふへしつけし待人やこん

四七 ゆふりあれし雪にしはしの隙みえて

四八 わかおこたりそ道にはかなき

四九 心のみ雪つもるやとは誰しらん

人のかたへゆかんと思へ共、雪深き故にをこたる也、

さて心のみ行共、誰かしらんと也、心のみ雪と風技（ハヤシ）

にいへる也

四〇 うらみはてめやつれもなき人

四一 庭の雪とはれは今朝の跡もおし

此雪にとはれぬ徒分（カ）には、庭の雪に跡のつかぬなれ

はうらみしと也

四二 小家かすくかきこもるみゆ

四三 かすかなる田中の雪の打けぶり

四四 道はあれともくる人はなし

四五 うとくなる心に雪やつもるらん

雪はふれ共道は有也、所詮うとき人の心に計、雪は

つもるよと也

四六 誰かはとはん山のした道

四七 爪木こる跡さへたゆる雪の中

四八 ゆふへになりぬいそく山かけ

四九 やすむ間の爪木につもる雪を見て

やすむ爪木の雪のつもる面白をみるく、日もくる

ゝ事也

五〇 松なりけりなけふる一むら

五一 分さりし雪のあさけのはるゝ野に

五二 千とりしはなくなみの月かけ

五三 雪はたゝうへにうきたるあはちかた

一句は、雪はうへに浮たるあはと云かけたる也、千

鳥、淡路によめり

五四 入日影かたふきかゝるおきつなみ

五五 舟はたしるき雪のつり人

五六 夕河や柴つみ小舟さしくたし

四五 是るかにしろき雪の宇治はし

雪のうち橋にてみれば、柴つむ舟のくたるさま面白也

吾暮て行春の湊は

四六 ちとり鳴たつ波のさむけさ

四七 舟よする雪のいそ崎ちかゝらし

四八 山こすからす雲になくこゑ

四九 箸鷹をすへの原野に日は落て

五〇 身を宇治山のかけとおもはし

五一 さえあかす嵐を床のあしろもり

宇治山の陰に網代を守人、かくは思ふましきと也、

それ／＼のわさなれば、よそめ計りきさま也

五二 春秋めてし山の木からし

五三 いつはあれと冬こそ月はくまなけれ

冬の月春秋にもます事也 吾秋は猶木葉隠も

五四 埋火にむかへは夜は、しつまりて

四五 のこりて風や月にさゆらん

月をみる夜さむければ、埋火の本に立帰に、月計こ

そのこりて寒かるらんと也

四六 砌の松そ雪に木たかき

四七 隙もなくこほる池水月さえて

池のあたりの月、さむきさま也

四八 夜更てをしの霜はらふこゑ

四九 月や我目さむる度にさえぬらん

吾夜を寒みねさめてきけは鴛そなく払もあへす霜や

置らん

五〇 又一しきりあられふるなり

五一 月みればむら雲かけてさゆる夜に

村雲のかゝる月の、霰の打ふりてさむき也

五二 立やすらへはなをさゆる袖

五三 埋火にかへるを月やうらむらん

五四 さえまさりぬるをちかたの空

五五 まとろみし埋火もきえかねなりて

埋火のきえぬ程はまとろみて、消れば寒く目も覚た

る也、鐘は更たる也

五六 雪のあしたの人のをとつれ

五七小野山の炭に妻木をとりそへて

都のさま也

五八 ほとけの名にもなみたおちけり

五九 ともし火ののこりすくなくとし暮て

歳暮に仏名を唱事也、光陰を惜む儀也

旅連哥

五〇 おさふる袖もなみたおちけり

五二 行人にこといみしもやたえざらん

首途に涙をいむ事也、それにも堪忍せて涙の落也

五三 いまはのきはゝおもひみたれぬ

五三 別路に忍ひしなみたさき立て

かねては涙おとさしと思ひしか、別るゝきはゝ乱て

落る也

五四 こなたかなたの跡のおもかけ

五五 足引の山ちをとをみけふこえて

山のこなたかなたの嶮難を越し面影、身にとまる事

也、五足引のこなたかなたに道はあれと都へいさと

云人はなし

五六 わかれをおしむ人のおもかけ

五七 名残こそあふ坂山の関ならぬ

逢坂関にて名残惜し人の面影の、関にとまる也、都

の人は逢坂迄門送をする也

五八 あひのる舟のはやきなみ風

五九 手向せし道をや神もをくるらん

手向せし神の舟に、我とあひのりをし給故にや、舟

のはやきと也

五〇 舟にさはらぬをちのしらなみ

五三 旅にとるぬさのしるしもけふこえて

是も神に旅行を祈し験みえて、浪の関に舟の行事也

五三 けふとしなれは秋はいぬめり

五三 嵐ふくもみちをぬさにたひたちて

一句は我紅葉をぬさに取也、五此度はぬさも取あへ

す、付心は秋の事也

五四 旅立つはやかてかへるもうきものを

五五とをくはまして伝もやはきく

五六 ゆく多しらるゝ沖の舟みち

五七都さへうきに出たつ旅のそら

都の中さへ旅立比はうければ、まして興の舟路のさ

こそと也

五八 みやこやおもひこしち行人

五九立わかれいかにくやしき旅ならん

越路迄立別て都を思ふ事也、母憑こし人の心はあら

ち山

六〇 数ならばやと何のかひなし

六一古郷の恋しきにゆく鷹を見て

古郷のかたへ行鷹の数に成て、我もゆかはやと也、

母北へ行鷹そなくなる

六二 旅のなかさをたれにうれへん

六三郭公山こえわひぬましてしはし

六四 時鳥一声過る雨おちて

六五雲はこすゑをうつむやまこえ

雲深き山越に、郭公一声音信て過たるさま也、雲埋

老樹空山裏

六六 木のした道に日こそ暮ぬれ

六七とをく行旅をや花にわするらん

六八 忍ふもちすり花のかそする

六九あさ霧の野をわけころも露もひす

朝露のしけき野に、花の色に咲たる中を分行袖面白

句ひて、忍もちすりの衣のやう也

七〇 ほのくくあくるたまくらの月

七一しく袖もうす花すゝき露みえて

是もしく袖もうすきに、花薄の露けく枕の月のほの

くくあくるさま面白事也

七二 あへすも旅の袖の露けさ

七三あし火たく宿はすゝろに月もうし

芦火たく旅宿に立よりもあへす涙の落たる事也、

母難波かたあし火たく

七四 おもひをそふる秋のよなく

七五夢に我みゆらん物をくさまくら

旅行人にわか思ひのそへは、定て草枕の夢にみゆら

んと也

五〇 夢よころもをかへしてやみん

五一 いとせめて都こひしきくさまくら

五二 草のまくらの秋は更けり

五三 甕かり衣かへす夢ちにうつやたれ

秋ふかき草枕に、衣をかへして夢を待に、心なく衣をうつ人はたそと也

五四 草のいほりは枕もそうき

五五 かりの世と旅ねにさへやしらさらん

草庵に住人、捨世の人也、そこに宿を借ては、此住るをうらやむへきに、さはなくてつらくのみ思事口惜と、我心をせつかんしたる也

五六 あくるもくらしをちの山もと

五七 からすなく夜やたゝ人もさはくらん

山本の明てもくらきに、鷹の鳴に旅人のおきさはく事也

五八 世中はみなかりそめとするものを

五九 たひねのみやははかなかるへき

六一 ひとへに袖はとをくみゆらん

六二 七都にもかへす夢ちかさよころも

六三 かへるへきかたこそなけれ旅の空

六四 ゆふへのくもにふみまよふ山

夕の雲に吹迷山、更帰らん空を思ふ也

六五 山かけは明ほのとをくふかき夜に

六六 かねたにをくれおきまよふ道

六七 みちの空にてなきそかなしき

六八 するへせし人も深山にふみまよひ

前句は哀傷也、付やう明也

六九 ほととをく絶にし友のめぐりきて

七〇 釜山ふみまよひいつるたひ人

七一 とへとも人のこたへせぬ山

七二 越くるや嶺の嵐にむせふらん

七三 行をわするゝ友とこそなれ

七四 知しらす岩ふむ山ちかたらひて

七五 足柄の山の岩ねを行時は知もしらぬもむつまじき

哉

五七 おのへのかねをさそふ夕霜

五八 山ちゆく杉むらさむみ日は落て

五九 しら雲のうへにはるけき山こえて

六〇 たゞ空のみや旅のゆくすゑ

六一 わかれし鐘のたくれのこゑ

六二 横雲にいく夜共なくあさたちて

六三 あすはつれてやこえん山道

六四 はるかなる月のゆくゑに嶺のくも

五明は又こゆへき山の

六五 あすもやかゝる山ちこえなん

六六 いもにこひ磯のしほひをあかすみて

磯山を越るに、しほひの面白ければ妹に見せたきと

也、五妹にこひ若の松原

六七 侘つゝをくる身をやなげかん

六八 旅にしてうきを都にきかすなよ

六九 涙はさらにつゝまれもせず

七〇 恋しさは都の文に巻籠て

七一 墨にそむるも袖はぬれけり

七二 一筆に旅のうれへをかきやらて

七三 跡ふまん道のすゑもおほえす

七四 我さきに駒の音する山くれて

七五 誰もたゞ身を思ふにや捨つらん

七六 丸をくれてひとり友にあふ山

七七 はかなしや野上のさとのかり枕

七八 伊吹おろしをかたしきの夢

七九 都の月にわれやかへらん

八〇 夢も身をさそひてさめねたひまくら

旅ねの夢に都をみる時分に、其まゝ夢の覚たらは都

に帰らんと、はかなく思ふ也

八一 まくらにきくもとをき川音

八二 舟にみなあすの渡をおもひ侘

八三 はなれそにかたふく笠屋浪かけて

八四 ねぬ夜くるしむ雨の舟人 舟の笠や也

八五 磯のまくらに夢もむすはず

八六 衣手に敷つの波の又こえて しまつの磯
とてあり

八七 夢たになみのまくらをそする

六〇一もしほ草かきたえぬ夜思やれ

六〇二磯うつ浪に松かせのこゑ

六〇三みし夢も思はぬ床のさよちとり

松風の声と云を衝の声になして、衝の声の面白に夢をもおしまぬ也

六〇四いかゝしつめん胸としもなし

六〇五跡もなをひゝきの灘のおきつふね

ひゝきのなたを漕過ても、又胸のさはく事也、源氏
うき事に胸のみさはくひゝきには響の灘もさはらさ
りけり

六〇六契りをきてもをとつればなし

六〇七程ふれはたゝもろこしの舟路にて

六〇八見よやすかたもやつればはてけり

六〇九ふるみちやたゝあま衣たひの袖

六一〇はかりもそことわかぬとを山

六一一うらなるゝ人も舟ちや迷ふらん

六一二しくれしはしややとりとふくれ

六一三とまるやとよせし舟行うらの松

六一四あすの道まで旅やいそかん

六一五をひ風をまほに引かけゆく舟に

六一六一夜をたのむ舟のとまふぎ

六一七風そよく声のかりねは夢もうし

声のえんに一夜をして、笛ふく舟に夢をたのめとも

見ぬ事也

六一八おほゆはかりの夢も見さりき

六一九風そよく声のかりねのみしか夜に

短夜のかりねなれば、覚程の夢もなき也、風そよく
声のあたりのかりね也

六二〇まはらなる海士の笛やの月をみて

六二一風はまくらにあらきはま萩

浦の旅の躰也、浜萩の風はけしくて、月をみる事さ

ひしき也

六二二かり枕みやこの夢の又とひて

六二三浪風にたにたひそなれ行

六二四たよりの文に

六二五いつくにてはつとか

旅人の文をひらかぬに、はや胸さはく也、此人いかなる文にてあるらんと也

六二六 身はたのますよ行末のそら

六二七 なからへて帰らん旅をまち見はや

六二八 なきになしてやこゝろやすめん

六二九 とし経たるひなのたひ人待わひて

六三〇 長々シクモ

六三一 袖ハイツヒナノ

ひなの長路にあれば也、綱手引舟に浦つたひを付也

六三二 夕暮ふかく人かへるなり

六三三 都にやたひのやつれを忍ふらん

六三四 手向しても旅はゆかまし

六三五 風あらずゆらのみさを舟に見て

六三六 見れはすさまし四方の山く

六三七 浪の音あら海中に舟出して

六三八 旅ころもなれこし月は有明に

六三九 はあらしのさ夜の中山

六四〇 たか袖ならし過るかけはし

六四一 旅ころも日も夕嵐ゆふしくれ

六四二 いくかもわくるむさしのゝはら

六四三 ふしのねはゆけ共おなし雲ゐにて

六四四 こなたかなたに行旅そうき

六四五 深山ちも一筋ならばまよはめや

六四六 いつをかかきりわかたひの道

六四七 武蔵野やわくれはとをき末もみつ